福州宋版大蔵経の研究
――宋版一切経の「一板五面三十行」に関する一考察――

牧野　和夫

本稿は、二〇〇七年九月、上海師範大学の仏教研究所において開催された「漢語大蔵経シンポジウム」で発表した「宋版一切経の「一板五面三十行」に関する一考察」の日本語版（一部に若干の補記を※を付して加えた）である。中国語訳（原邃訳）は、発表当日刊の同シンポジウム発表論文集に収載されたが、改めて方廣錩氏編『蔵外仏教研究』十四集（二〇一〇年八月刊　中国人民大学出版）に再録された。続考を二〇一一年九月二十二日に開催された「宋版雕印研討会」（於上海図書館）において口頭発表したが、近く中国で刊行される論集に収載予定である。

はじめに

日本に舶載された宋版一切経に関して、現存本の「実物」に即した調査研究を「刊・印・修」の識別に留意しつつ、進めてきた。

その過程で、明瞭になりつつある〝事実〟に関して報告させて頂く。なお、本研究は醍醐寺・知恩院・東寺・本源寺蔵の東禅寺・開元寺両版の一切経を軸に行ったもので、御所蔵の寺院・文庫・諸機関の格別な御配慮の賜物であり、研究分担・協力者として中村一紀・梶浦晋・渡辺信和・斉藤隆信・柏崎順子の同学諸氏、多くの院生のご協力に拠るものであることを明記して、謝意を表するものである。

一、〝五面一板〟ということ（一）――〝知恩院蔵宋版一切経〟――

宋版一切経の内、東禅寺・開元寺両版は、一板六面を基本にして構成される版経であるが、時に〝五面一板〟の混入することは、研究者に気づかれてきたようである。

例えば、『日本書誌学辞典』（一九九九年三月、岩波書店）「東禅寺版蔵経」項には「中国北宋の元豊三年（一〇八〇）から政和二年（一一一二）にかけて、慧空大師冲真らの発願で福建省福州の東禅寺等覚院で開版された私版「大蔵経」。五八〇函六一〇八巻。装訂は帖装本、版式は毎半三十ないし三十六行、行十七字、毎半折六行。」とある。「毎半三十ないし三十六行、行十七字、毎半折六行」ということは、一板五面三十行の存在

をみとめていたことになる。同辞典「開元寺版蔵経」項には「版式は毎版三十行、行十七字、毎半折六行」とあるが、一板六面毎面六行の計一板三十六行を基本とすることは確実で、「毎版三十行」との記述は不審であるが、「三十行」即ち、一板五面毎面六行の計一板三十行の存在を認めていたことになる。

しかし、〝一板五面〟の存在することが持つ意味と詳細については、課題として取り上げられることなく、〝看過〟状態が続いてきたといってよい。

昨年調査を了えた手元の資料群のなかから、具体的に知恩院蔵宋版一切経の『尼羯磨巻下八』一帖に即して、例示するならば、

経名　尼羯磨巻下八　出四分律
題記　G

	面数	柱	刻工名・施財刊語
1板	6	—	ナシ
2板	6	入　八巻　二	ナシ
3板	6	入　八巻　三	ナシ
4板	6	入　八巻　四	ナシ
5板	6	入　八巻　五	ナシ
6板	6	入　八巻　六	ナシ
7板	6	入　八巻　七	ナシ
8板	6	入　八巻　八	ナシ
9板	5	入　八巻　九	ナシ
10板	6	入　八巻　十	ナシ
11板	6	入　八巻　十一	ナシ
12板	6	入　八巻　十二	ナシ
13板	6	入　八巻　十三	ナシ
14板	6	入　八巻　十四	ナシ
15板	6	入　八巻　十五	ナシ
16板	6	入　八巻　十六	ナシ
17板	6	入　八巻　十七	ナシ
18板	4面了	十八紙尾	付得

表の見方を示すならば、「題記　G」は「福州東禅等覚院住持傳法沙門智賢謹募衆縁恭為…」に始まる三行の題記である（アルファベットは『本源寺蔵宋版一切経調査報告』〈一九七九年三月、同朋学園仏教文化研究所〉所載題記一覧の通し番号、以下同じ）。「一板」は第一板であることを指し、「六面」は三箇の山折を持ち一板分で六面合計三十六行に及ぶものである。「柱」はほぼ第一面と第二面の折目に存し、上方に「一」と刻して板数を標するものである。第「二板」以下も同様である。知恩院蔵宋版一切経の内、『尼羯磨巻下』（千字文「入」）一帖は、一板一紙、合計十八板十八紙で構成される、刻工「付得」の手に係る東禅寺版であるが、第九板のみが一板一紙五面三十行であることを示している。

調査進行中の知恩院の二〇〇四年度調査分に関して、二十八帖分の「五面一板」の有無・位置状況を一覧表示するならば、次のようになる。

〈知恩院〉

両面刷	経名	巻数	千字文	総板数	題記	寺	5面1板の位置
	五分比丘尼戒本一		受	23板	G	東	11板
	四分戒本二		受	18板	G	東	9板
	四分戒本三		受	19板	G	東	10板
	四分比丘尼戒本五		受	24板	G	東	12板
	摂大乗論釈	一	孝	14板	ナシ（空白）	開	8板
	摂大乗論釈	二	孝	11板	ナシ（空白）	開	5面ナシ
	摂大乗論釈	三	孝	15板	ナシ（空白）	開	8板
	摂大乗論釈	四	孝	13板	ナシ（空白）	開	5面ナシ
	摂大乗論釈	五	孝	15板	ナシ（空白）	開	8板
	摂大乗論釈	六	孝	12板	ナシ（空白）	開	5面ナシ
	摂大乗論釈	七	孝	15板	ナシ（空白）	開	8板
	摂大乗論釈	八	孝	15板	ナシ（空白）	開	9板
	摂大乗論釈	九	孝	16板	ナシ（空白）	開	9板
	摂大乗論釈	十	孝	15板	ナシ（空白）	開	8板
	百一羯磨法一		訓	17板	G	東	5面ナシ
	十誦羯磨比丘要用二		訓	19板	G	東	10板
○	弥沙塞羯磨本三		訓	31板	G	東	16板
	優波離問経四		訓	18板	G	東	9板
	曇無徳律部雑羯磨五		訓	28板	G	東	14板
	羯磨一巻六		訓	31板	G	東	16板
	四分律刪補隋機羯磨巻下二		入	22板	G	東	11板
○	四分僧羯磨巻下五		入	24板	G	東	12板
○	曇無徳部四分律刪補隋機羯磨序一		入	34板	G	東	17板
	四分僧羯磨巻中四		入	24板	G	東	12板
○	尼羯磨巻中七		入	27板	G	東	14板
	尼羯磨巻下八		入	18板	G	東	9板
○	四分僧羯磨巻上并序三		入	24板	G	東	12板
	尼羯磨巻上并序六		入	23板	G	東	12板

一覧表の見方は、前掲の知恩院蔵『尼羯磨巻下』と基本的に同じである。一行目の『五分比丘尼戒本』は巻一、千字文番号「受」。一板一紙六面、毎面六行の三十六行を基本として構成されるが、第十一板のみ一板一紙五面三十行である。「寺」項の「東」は東禅寺版、「開」は開元寺版で、題記「G」は前掲の通りである。「両面刷」の項は、料紙の表から裏へ刷印が及ぶものには「○」で標示する。

この二十八帖から〝一板五面〟の状況を説明しておく。

留意すべき点は、受・訓・入の三箱十八帖は東禅寺版であり、孝の一箱十帖は開元寺版で、いづれの箱にも〝一面五板〟を含む帖が複数現存している〝事実〟である。

知恩院蔵宋版一切経については、是澤恭三「知恩院蔵宋版一切経の伝来に就いて」(『南都仏教』三十五号、一九七五年)によって、宗像社現蔵の重要文化財として周知の色定法師一筆一切経の底本となるものであろうとの推論がなされている。

九州大学の行った平成時の再調査において顕在化した新知見(調書を披見し確認。宗像社文化財保存課の御厚意による)をもって見直すとき、知恩院蔵宋版一切経を色定法師一筆一切経の底本とする推論に多くの不審点が浮上してきたが、現在迄、解明されず残されてきた。従って是澤説は、殆ど〝採用〟されることなく経過してきたが、その後の知恩院蔵一切経の補充調査に基づく再調査(進行中)に拠る新たな事実も確認され、知恩院蔵宋版一切経は、宗像社旧蔵として知られた博多の〝宋商人〟将来の刊一切経であることがほぼ確実となった。日本の平安後末期の書写一切経で底本が判明し、而も現存する舶載宋版一切経と解明できたものはおそらく色定法師書写一切経が初めてではないかと思われる。詳細な報告は別に発表を予定している。

五面一板三十行の板の位置と、総板数との関係を示すならば、東禅寺版では五面一板は第九板から第十七板迄存在する。第九板が五面の場合、総板数は十八板で、『四分戒本』巻二、『優婆離問答』、『尼羯磨巻下』がこれに該当する。

第十板が五面の場合は、総板数十九板が『四分戒本』巻三、『十誦羯磨比丘要用』巻二の二帖あり、第十一板が五面のケースは、総板数二十二板が『四分律刪補隋機羯磨』巻下の一帖、総板数二十三板が『五分比丘尼戒本』巻一の一帖である。

第十二板が五面で、総板数二十三板は一帖、総板数二十四板は三帖、などである。総板数十七板(※総板数十八板のものでは、五面一板の有無が一定していない)には、五面一板はない。

開元寺版に移る。五面一板が第八板の場合、『摂大乗論釈』巻一は総板数十四板、同巻三、五、七は総板数十五板である。五面一板が第九板では、同巻八が総板数十五、同巻九が総板数十六板である。総板数十二・十三板以下(※但し、総数十三板のもので五面一板の存在するケースもある)には五面一板はない。

二、〝一板五面〟ということ(二)

醍醐寺蔵・本源寺蔵の刊一切経における〝五面一板〟に関するデータを示すならば、次の如き一覧表となる。醍醐寺蔵本・本源寺蔵本の昨年度までの調査分からサンプル的に採り上げたものである。

〈醍醐寺〉

両面刷	経名	巻数	千字文	総板数	題記	寺	5面1板の位置
	四分律蔵	二十一	夫	16板	G	東	5面ナシ
○	四分律蔵	二十二	夫	18板	G	東	9板
○	四分律蔵	二十三	夫	17板	G	東	5面ナシ
○	四分律蔵	二十四	夫	19板	G	東	10板
	四分律蔵	二十五	夫	15板	G	東	5面ナシ
○	四分律蔵	二十六	夫	17板	G	東	5面ナシ
○	四分律蔵	二十七	夫	18板	G	東	5面ナシ
○	四分律蔵	二十八	夫	17板	G	東	5面ナシ
	四分律蔵	二十九	夫	15板	G	東	5面ナシ
○	摂大乗論	一	當	16板	F	東	5面ナシ
○	摂大乗論	二	當	16板	F	東	5面ナシ
○	摂大乗論	三	當	16板	F	東	5面ナシ
○	摂大乗論	四	當	18板	F	東	9板
	摂大乗論	五	當	19板	F	東	10板
	摂大乗論	六	當	14板	F	東	5面ナシ
○	摂大乗論	七	當	20板	F	東	10板
○	摂大乗論	八	當	19板	F	東	10板
○	摂大乗論	九	當	21板	F	東	11板
	摂大乗論	十	當	16板	F	東	5面ナシ
○	十誦律	五十一	甘	19板	G	東	10板
○	十誦律	五十二	甘	19板	G	東	10板
○	十誦律	五十三	甘	19板	G	東	10板
○	十誦律	五十四	甘	18板	G	東	10板
○	十誦律	五十五	甘	21板	G	東	11板
○	十誦律	五十六	甘	21板	G	東	11板
○	十誦律	五十七	甘	19板	G	東	10板
○	十誦律毘尼巻上九		甘	19板	G	東	10板
○	十誦律毘尼巻中十		甘	20板	G	東	11板
○	十誦律毘尼巻下十一		甘	22板	G	東	12板
	大般若波羅蜜多経	一	天	14板	N系	開	8板
	大般若波羅蜜多経	二	天	15板	N系	開	8板
	大般若波羅蜜多経	三	天	13板	N系	開	7板
	大般若波羅蜜多経	四	天	14板	N系	開	7板
	大般若波羅蜜多経	五	天	14板	N系	開	7板
	大般若波羅蜜多経	六	天	14板	N系	開	7板
	大般若波羅蜜多経	七	天	14板	N系	開	7板
	大般若波羅蜜多経	八	天	14板	N系	開	7板
	大般若波羅蜜多経	九	天	14板	N系	開	7板
	大般若波羅蜜多経	十	天	14板	N系	開	7板
	大般若波羅蜜多経	十一	地	15板	N系	開	8板
	大般若波羅蜜多経	十二	地	14板	N系	開	8板
	大般若波羅蜜多経	十三	地	14板	N系	開	8板
	大般若波羅蜜多経	十四	地	14板	N系	開	8板
	大般若波羅蜜多経	十五	地	14板	N系	開	8板
	大般若波羅蜜多経	十六	地	14板	N系	開	8板
	大般若波羅蜜多経	十七	地	13板	N系	開	7板
	大般若波羅蜜多経	十八	地	16板	N系	開	8板
	大般若波羅蜜多経	十九	地	14板	N系	開	8板
	大般若波羅蜜多経	二十	地	16板	N系	開	8板

N系題記（新出）：「福州衆縁寄開元寺雕経都會蔡俊臣陳詢陳靖劉漸與證會住持沙門本明恭為／今上皇帝祝延聖壽文武官僚同資禄位雕造／毘盧大蔵経印板一副計五百餘函時政和乙未歳六月日勧縁沙門行崇謹題」

〈本源寺〉

両面刷	経名	巻数	千字文	総板数	題記	寺	5面1板の位置	備考
	続高僧伝	十九	達	不明	G系	東	10板	13板まで、以下欠。
	続高僧伝	二十三	達	不明	G系	東	12板	21板まで、以下欠。
	続高僧伝	二十四	承	不明	G系	東	10板	18板まで、以下欠。
	続高僧伝	二十六	承	不明	G系	東	14板	21板まで、以下欠。1板～5板まで欠。
	続高僧伝	二十八	承	不明	G系	東	14板	21板まで、以下欠。26板の１面分あり。
	続高僧伝	二十九	承	不明	G系	東	15板	29板まで、以下欠。
	続高僧伝	三十一	承	不明	G系	東	不明	14板5面まで、以下欠。
	弘明集	一	集	不明	G系	東	10板	14板まで、以下欠。
	弘明集	二	集	17板	G系	東	5面ナシ	
	弘明集	三	集	13板	不明	東	5面ナシ	
	弘明集	六	集	不明	不明	東	10板	20板まで、以下欠。
	弘明集	十一	墳	不明	不明	東	5面ナシ	16板まで、以下欠。
	弘明集	十三	墳	13板	不明	東	5面ナシ	
	弘明集	十四	墳	不明	G系	東	5面ナシ	11板まで、以下欠。
	廣弘明集	五	典	不明	不明	東	5面ナシ	13板まで、以下欠。1～3板まで欠。
	廣弘明集	七	典	不明	不明	東	5面ナシ	15板まで、以下欠。
	亦字音義		亦	不明	不明	東	13板	23板まで、以下欠。1～5板まで欠。
	廣弘明集	十一	亦	不明	ナシ	開	16板	21板まで、以下欠。
	廣弘明集	十二	亦	18板	ナシ	開	10板	
	廣弘明集	十三	亦	30板	ナシ	開	15板	
	廣弘明集	十五	亦	不明	不明	開	16板	18板まで、以下欠。1～7板まで欠。
	廣弘明集	十六	亦	10板	ナシ（無刷印）	開	5面ナシ	印造枠ナシ。
	廣弘明集	十七	亦	不明	ナシ	開	10板	19板まで、以下欠。
	廣弘明集	二十	亦	不明	ナシ（3行分無刷印）	開	11板	16板まで、以下欠。
	聚字音義		聚	不明	ナシ	開	17板	24板まで、以下欠。
	廣弘明集	二十二	聚	25板	不明	開	12板	1～7板まで欠。
	廣弘明集	二十三	聚	23板	Q	開	12板	
	廣弘明集	二十四	聚	21板	Q	開	11板	
	廣弘明集	二十五	聚	28板	Q	開	15板	
	廣弘明集	二十八	聚	不明	不明	開	17板	30板まで、以下欠。1～11板まで欠。
	廣弘明集	二十九	聚	不明	不明	開	17板	30板まで、以下欠。1～3板まで欠。
	廣弘明集	三十	聚	不明	ナシ		14･15板	26板まで、以下欠。16板は5面1紙と1面1紙が継いである。
	…明王鳥樞瑟摩明王経巻下		廻	不明	Q	開	9板	15板まで、以下欠。 刻工＝王孜・林文・丘受・蔡青ほか
	大教王経	上	廻	不明	Q	開	7板	13板まで、以下欠。
	阿唎多羅陀羅尼阿嚕力品	十四	漢	不明	R	開	11板	17板まで、以下欠。
	大寶廣博楼閣善住秘密陀羅尼経	上	悦	不明	ナシ	開	9板	14板まで、以下欠。
	三経同巻（葉衣観自在菩薩経ほか）		感	13板	R	開	7板	刻工＝丘受・金老・李保ほか
	二巻同巻（阿閃如来念誦供養法ほか）		感	17板	R	開	12板	刻工＝丘受・甘正ほか
	二巻九巻（佛説一切如来金剛三業最上秘密ほか）		俊	15板	ナシ	開	8板	刻工＝付言・林士・付中ほか
	法華文句	五	ナシ	不明			14板	29板まで、以下欠。 刻工=丁升・戊文・椿・英ほか
	摩訶止観	六	ナシ	不明			16板	24板まで、以下欠。 刻工＝彦・言・付言・付及・陳立ほか
	摩訶止観	八	ナシ	不明			16板	29板まで、以下欠。刻工＝青
	摩訶止観	十	ナシ	不明			16板	30板まで、以下欠。刻工＝林明・陳ほか
	摩訶止観輔行傳弘決	六	ナシ	不明			19板	35板まで、以下欠。刻工＝周中・方・林有ほか
	傳法正宗記	十一	ナシ	不明			6板	10板まで、以下欠。刻工＝言・積・宗
	大方廣佛華厳経合論	六	ナシ	16板	N	開	9板	刻工＝英・劉ほか
	大方廣佛華厳経合論	三十二	ナシ	16板	ナシ	開	8板	刻工＝林妨・鄭昌ほか
	大方廣佛華厳経合論	四十二	ナシ	16板	ナシ		9板	刻工＝黄太・阮生ほか
	大方廣佛華厳経合論	四十三	ナシ	16板	N	開	9板	刻工＝林近・鄭昌・王英ほか
	大方廣佛華厳経合論	四十四	ナシ	16板	欠		9板	刻工＝鄭昌・余奴ほか
	大方廣佛華厳経合論	四十五	ナシ	不明	欠		9板	17板まで、以下欠。刻工＝余記ほか
	大方廣佛華厳経合論	四十八	ナシ	不明	N	開	9板	15板まで、以下欠。刻工＝丁光ほか
	大方廣佛華厳経合論	四十九	ナシ	不明	欠		8板	13板まで、以下欠。
	大方廣佛華厳経合論	六十三	ナシ	17板	欠		9板	刻工＝英・賜ほか
	大方廣佛華厳経合論	六十八	ナシ	15板	N	開	8板	刻工＝曾逵ほか

醍醐寺蔵本の場合について、サンプル的に東禅寺版の「夫」「當」「甘」、開元寺版の「天」「地」の五箱を一覧表にして示した。東禅寺版について、知恩院蔵本と同様に分析するならば、第九板が五面一板の『四分律蔵』巻二十二、『摂大乗論』巻四が総板数十八板で、この二帖のみ。第十板が五面の場合は、総板数十八板が『十誦律』巻五十四、総板数十九板が『四分律蔵』巻二十四、『摂大乗論』巻五、『十誦律』巻五十一、五十二、五十三、五十七、『十誦律毘尼』巻上の七帖、総板数二十板が『摂大乗論』巻七の一帖である。第十一板が五面の場合は、総板数二十一板が『摂大乗論』巻九、『十誦律』巻五十五、五十六の三帖、総板数二十板が『十誦律毘尼』巻中の一帖である。

次に、開元寺版のケースに移る。「天」「地」箱『大般若波羅密多経』巻一から巻二十迄である。五面一板は、第七板か第八板かである。第七板が五面一板の場合、総板数は巻三、十七の二帖が十三板であり、第八板が五面一板の場合、総板数は巻一、十二～十六、十九の七帖が十四板であり、巻二、十一が総板数十五板、巻十八が十六板である。

本源寺蔵宋版一切経については、既に悉皆調査を了えているが、五面一板の問題を意識的に調査項目に挙げ得たのが調査の途中のことであり、サンプルとして千字文番号「達」「承」「集」「俊」などから「一板五面」の確認できるもののみ拾う。

本源寺蔵宋版一切経は、現存する本がすべてに亘り虫損など甚だしく、断片や糊はがれなどの数も多く、五面一板の確認は勿論、総板数の知られるものは少ない。

三、現存本に拠る「両面刷」と「一板五面」

日本現存の宋版一切経に〝両面刷〟の帖が現存する。この点の指摘として最新のものは、中村一紀氏「書陵部所蔵宋版一切経の来歴について、その印造から現代まで―時々の保全活動を交えて―」(『禁裏・公家文庫研究』第二輯　二〇〇六年三月　思文閣出版)の補注(5)に次のようにある。

「現在南宋後期の印造として右の四蔵が知られ、それらは補刻を行いながらも印刷方法は同じであると認識していたが、金沢文庫蔵および書陵部蔵では他と一部に摺り方に異なる部分がある。それは東寺・本源寺の各蔵では、経巻によっては途中の葉でその半分から以後を裏面に折り返して両面に印刷している例が見られる。例えば東寺夙字函『中阿合経』(東禅寺版)巻一六、巻一八は共に全一八葉であるが、両巻とも第一五葉第三面で裏面に折り返している。また、同じく魏字函『妙法蓮華経文句』(東禅寺版)巻一〇は全二九葉であるが、その第一五葉の第三面で以降は裏面に折り返している。こういう形態は南宋も比較的早い頃の印造といわれる醍醐寺所蔵経(虢字函『止観輔行傳弘決』(東禅寺版)においても全三三葉中第一七葉五面から裏に折り返している。ところが、本蔵の魏字一函『妙法蓮華経文句』(東禅寺版)では折り返さずに全文表に印刷している。また金沢文庫蔵の『中阿合経』は東寺と同版であるが、文庫の西岡芳文氏のご教示によれば書陵部蔵と同じく表面のみの印刷であるという。裏面に折り返すのは紙の節約によるのか、また表面のみの印刷は手間を省いたものか明らかでないが、ともかく南宋後期後半に印造されたこの二蔵にのみそれ以前とは異なる形状が見られる。これらの経典はみな東禅寺版であるが、これが東禅寺版に限った

ことかは他蔵の精査が進まなければ明らかにはならない。」

「五面一板」の位置は、東寺蔵『妙法華経文句』巻十（東禅寺版）では全二十九板の約半分の第十五板に当るが、表面から裏面へは第十五板で、第一面から第三面迄が表面、後表紙を挟んで、同第十五板第四面から裏面に移る、ということになろう。第十五板は、総板数の約半分に当る。醍醐寺蔵『妙法華経文句』巻一～七も又、東禅寺版であるが、巻一・四の両帖は、全三十一板（葉）で、第十六板から五面一板に当り、表面は第十五板第三面まで、後表紙を挟んで第四・五面は裏面へ廻る。巻二は、全二十九板、第十五板が五面一板に当り、その第一面から第三面迄と後表紙見返し一面が表面に、紙背は後表紙見返し一面と、第十五板の第四・五面へと連続する。

巻六・七の両帖は、各々全板数が三十三板と三十二板で、いずれも十六板が五面一板である。後表紙を挟んで裏面は六面一板の第十七板以下に連続する。醍醐寺蔵本には、往々にして五面一板をもって、表・裏面の境とした「両面刷」の帖冊が認められる。更に例を加えるならば、前掲の醍醐寺蔵『十誦律』巻五十三・五十四、『十誦律毘尼』巻上・下は、すべて「五面一板」の葉をもって表面から後表紙を挟み、裏面へ連続している両面刷である。まさに「五面一板」の葉をもって表・裏両面に亘るのである。

しかし、現存の両面刷の帖がすべて〝五面一板〟の葉をもって表面から裏面へ移るかというと、そうは云えない。

ここで、東禅寺版の経巻帖数を同じくする醍醐寺・知恩院蔵

醍醐寺蔵

両面刷	経名	巻数	総板数	寺	5面1板の位置	備考
	四分律蔵	二十一	16板	東	5面ナシ	
○	四分律蔵	二十二	18板	東	9板	オモテ:14板3面まで。ウラ面は14板4面～。
○	四分律蔵	二十三	17板	東	5面ナシ	オモテ:14板3面まで。見返し1面空白あり。ウラ面は14板第4面～。
○	四分律蔵	二十四	19板	東	10板	オモテ:14板まで。ウラ面は15板～。
	四分律蔵	二十五	15板	東	5面ナシ	
○	四分律蔵	二十六	17板	東	5面ナシ	オモテ:12板3面まで。ウラ面は12板4面～。
○	四分律蔵	二十七	18板	東	5面ナシ	オモテ:14板3面まで。ウラ面は14板4面～。
○	四分律蔵	二十八	17板	東	5面ナシ	オモテ:13板3面まで。ウラ面は13板4面～。
	四分律蔵	二十九	15板	東	5面ナシ	

知恩院蔵

両面刷	経名	巻数	総板数	寺	5面1板の位置	備考
	四分律蔵	二十一	16板	東	5面ナシ	
	四分律蔵	二十二	18板	東	9板	
	四分律蔵	二十三	17板	東	5面ナシ	
○	四分律蔵	二十四	19板	東	10板	10板は3面までオモテ。ウラ第1面空白を挟んで4･5面ウラ。
	四分律蔵	二十五	15板	東	5面ナシ	オモテ:9板3面まで。ウラ面は9板4面～。
○	四分律蔵	二十六	17板	東	5面ナシ	
	四分律蔵	二十七	18板	東	5面ナシ	
	四分律蔵	二十八	17板	東	5面ナシ	
	四分律蔵	二十九	15板	東	5面ナシ	

の〝両面刷〟を比較してみるならば、次の如く刷印が裏面に及ぶ箇所を異にして、そこに法則性や規則性を見出し難いことが判明する。前引の知恩院本の〝五面一板〟の一覧表の「夫」箱(『四分律蔵』巻二十一至巻二十九)を、同じ東禅寺版の醍醐寺蔵刊一切経の「夫」箱と比較するならば、醍醐寺蔵の巻二十二・二十四の両巻は、五面一板の第九・第十板と無縁の、六面一板の葉をもって裏面へ移る両面刷である。むしろ、知恩院蔵の巻二十四の方が、五面一板の第十板第三面までを表面とし、後表紙を挟む形で裏面に及び、見返し一面から第十板第四・五面へ連続する「一板五面」に係わる両面刷である。

結び、「一板五面」と両面刷　―試案―

以上第三章までのサンプル的な抽出調査と分析に基き、各蔵毎に表示する。

今後の調査で例外も出てくる可能性もあるが(とくに千字文番号の遅いものや、追蔵のものに多少その痕跡が認められる)、現在調査済みの範囲で恣意的に拾った見本として示す。

表の見方の一例を挙げる。醍醐寺・東禅寺版の総板数十八板の項を見ると、「一板五面」葉のないものが一例(点数)、「一板五面」葉の存在するものが合計で三例、うち第九板が「一板五面」葉のもの二例、第十板が「一板五面」葉のもの一例ということを示す。総板数十九板の項は、「一板五面」葉のないものはなく、第十板が「一板五面」葉のもの八例を数える。

醍醐寺・東禅寺版

	総板数	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
点数	5面ナシ				1	2	5	4	1(?)				
	5面アリ (5面の位置)								2 (9板) 1 (10板)	8 (10板)	1 (10板)	4 (11板)	1 (12板)

	総板数	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34
点数	5面ナシ												
	5面アリ (5面の位置)												

醍醐寺・開元寺版

	総板数	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
点数	5面ナシ												
	5面アリ （5面の位置）			2 （7板）	7 （7板） 7 （8板）	2 （8板）	2 （8板）						

	総板数	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34
点数	5面ナシ												
	5面アリ （5面の位置）												

知恩院・東禅寺版

	総板数	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
点数	5面ナシ					2	1	4	1				
	5面アリ （5面の位置）								4 （9板）	3 （10板）			1 （11板）

	総板数	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34
点数	5面ナシ												
	5面アリ （5面の位置）	1 （11板） 1 （12板）	4 （12板）			1 （14板）	1 （14板）			2 （16板）			1 （17板）

知恩院・開元寺版

	総板数	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
点数	5面ナシ	1	1	1									
	5面アリ （5面の位置）				1 （8板）	4 （8板） 1 （9板）	1 （9板）						

	総板数	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34
点数	5面ナシ												
	5面アリ （5面の位置）												

一覧表から推測しうるのは、東禅寺版は総板数十八板以上の帖に必ず〝一板五面〟の葉が存することである。しかも、その葉は、総板数の半分の位置の板数を占めることが多く、少なくとも総板数の半分を下ることはない。開元寺版については、総板数十三板以上の帖に必ず〝一板五面〟の葉が存し、しかもその葉は東禅寺版と同様に、総板数の半分の位置の板数を占めることが多く、少なくとも総板数の半分を下ることはない。この規則性は、現在までの調査済みの帖に、ほぼ適用できる（但し、調査の初期段階では、このような視点を欠いていたので調書には〝一板五面〟葉の確認を落としているものが圧倒的であることを付記する）。

このことは、何を意味するのであろうか。ひとつの試案を提示することを許して頂く。東禅寺版・開元寺版のいずれも刊行の計画立案に際して当初は「両面刷」をプランとしたもの（おそらく、〝紙数〟から函数に至るまで割り出されていたかと思われる）であったか。東禅寺版は、総板数十八板以上、開元寺版は総板数十三板以上のものについて「両面刷」を前提として「雕・印」（〝印造〟〝装潢〟に関しては確言し得る材料はないが）を行う手筈であったのではないか、と推定する。

現存の両面刷の事例との対応関係を考慮して、「両面刷」のプランの際に「五面一板」の葉が、想定された両面刷の折り返しの目安であった、という推測は、成り立つであろう。少なくとも知恩院蔵本や醍醐寺蔵本の印造・装丁期には、そうした理解が残っていたのではないか、と考える。逆にいえば、プラン当初は、後表紙及び見返しを備えた「五面一板」の葉をもって折り返した両面刷の一帖が想定されていたもの、と思われる。

何故、東禅寺版が総板数十八板以上、開元寺版が総板数十三板以上に「両面刷」を想定したのか、その判断の基準などについての推測は、別稿に譲る。

表紙などに関していうならば、知恩院蔵本はすべて近世における改装の手を経ており、醍醐寺蔵本も原装を残すも部分的な改装を経ているようである。従って確言できる範囲は極めて狭いものである。また、刷印時と雕刻時とがほぼ同時頃の、即ち〝修〟などのない早印に恵まれないこともあり、補刻葉をもって推測の材料にせざるを得ない点も、断定を難しくしている。

なお、日本舶載の宋版一切経の内、現存する一蔵分の東禅寺版などに関する各蔵の刷印時期は、牧野「宋版一切経補刻葉に見える「下州千葉寺了行」の周辺」(『東方学報　京都』第七三冊、二〇〇一)、同「我邦舶載東禅寺版の刷印時期についての一事実　―東寺蔵一切経本東禅寺版と本源寺蔵一切経本東禅寺版の刷印時期―」(『東アジア出版文化の研究』第六号、二〇〇四)など御参照ください。

＊　＊

本稿は、科研特定領域研究「東アジア出版文化の研究」(二〇〇一～二〇〇四年)・科研挑戦的萌芽研究(二〇〇八～二〇一〇年)に拠る調査データに基づいた研究であるが、二〇一一年度科研基盤研究(B)課題番号２２３２００５に拠る調査情報蒐集に拠る新知見(いずれ調査報告書に盛り込む予定)を見据えた枠組みとして納まる内容となっていることを附記する。

＊　＊　＊

なおなお、平成十五年度本源寺調査によって、次の事実を確認していたので、追記しておく。

前期思渓版の『大般若波羅密多経』(三聖寺旧蔵の「圓覚寺司自紙板」墨文印のあるもの)に拠るならば、版式は開元寺版と同じく六面一紙。総板数半ばで、五面一紙を混じえるが、音義を巻末尾題に附すものである。刻工名の位置も開元寺版に同じ。東禅寺版に始まった、両面刷を予想した五面一板を混在させる形式は、思渓版にも当初は継続されていたもののようである(とくに開元寺版の形式を学ぶか)。